

# 孟達が太守を務めた、新城郡について

佐藤ひろお

5 諸葛亮の第一次北伐で、成否の鍵となったのは、**新城太守の孟達**との連携でした。

孟達は、劉璋、劉備、曹丕と、次々と主君を変えてきました。とくに、曹丕から孟達への信頼は絶大で、対蜀戦線である「西南の任」を託したため、群臣に危ぶまれたほどです。曹丕が崩御すると、孟達は魏で孤立するようになり、諸葛亮との呼応を画策しました。ところが、司馬懿の奇襲によって孟達は斬首され、蜀軍は出鼻を挫かれました。

孟達がいた「新城」は、どのような土地だったのでしょうか。それを、行政区分（郡県）の変遷に着目して、検討します。

15

## 1. 『三国志』卷二 文帝紀 注引『魏略』

即ち達を封拜し、還りて**新城**太守を領せしむ。

## 2. 『三国志』卷四十 劉封伝

20 蜀平らぐ後、（孟）達を以て**宜都**太守と為す。

建安二十四（二一九）年、達に命じ、秭歸しきよ従り北のかた**房陵**を攻む。**房**

**陵**太守の蒯祺、達の兵の害する所と為る。

25 達將に進みて**上庸**を攻めんとするに、先主陰かに達の独りにて任じ難きを恐れ、乃ち（劉）封を遣はし、漢中よ自り沔水べんに乗じて下り、達の軍を統べしめ、達と**上庸**に会す。

30 **上庸**太守の申耽、衆を挙げて降り、妻子及び宗族を遣はして成都に詣らしむ。先主、耽に征北將軍を加へ、**上庸**太守、員郷侯を領すること、故の如し。耽の弟たる儀を以て、建信將軍、**西城**太守と為し、封を遷して副軍將軍と為す。

↓ 蜀將孟達は、独力で**房陵**、劉封と協力して**上庸**を曹操から奪う  
劉備は、魏の**上庸**太守の申耽を留任とし、新たに**西城**太守を任命  
劉備の勢力圏になった後の**房陵**太守は未詳（未設置？）

35 関羽 **樊城**・**襄陽**を囲みて自り、連りに封・達を呼び、兵を發して自ら助けしめんとす。封・達、山郡の初めて附して未だ動揺す可きを以て辞し、羽の命を承けず。会羽覆敗し、先主之を恨む。又、封と達と忿争して和せず、封尋いで達の鼓吹を奪ふ。

40 達既に罪を懼れ、又封に忿恚し、遂に表して先主を辞し、領する所を率ゐて魏に降る。

魏文帝 達の姿才・容觀を善しとし、以て散騎常侍、建武將軍と為し、

平陽亭侯に封ず。房陵・上庸・西城の三郡を合はせ、達に新城太守を領せしむ。

45 ↓ 魏に降った孟達は、魏文帝によって、新城郡の太守に任命された

新城郡は、房陵・上庸・西城の三郡を併合したもの（遥任）

征南將軍の夏侯尚・右將軍の徐晃を遣はし、達と共に封を襲ふ。

（西城太守）申儀封に叛す。封破れて走り、成都に還る。

50 （上庸太守）申耽魏に降る。魏耽に懷集將軍を仮し、徙して南陽に居

せしむ。（申）儀を魏興太守とし、真郷侯に封じ、洵口に屯せしむ。

↓ 蜀の西城太守の申儀は、魏興太守に（改称、任地は同一、後述）

…申儀が太守となった西城（魏興）郡は、新城郡から分離？

55 のちに申儀は、司馬懿に協力して、孟達と蜀の連携を阻止

蜀の上庸太守の申耽は、任地を去る

…申耽が太守だった上庸郡は、新城郡に統合されて廃止

蜀の房陵太守が見えず、やはり任命がなかったと考えられる

…太守が不在の房陵郡は、新城郡に統合されて廃止

60

建安末期、西城郡・上庸郡・房陵郡をめぐり、魏と蜀が抗争し、軍事的

制圧や降伏・裏切りによって、支配者が変転しました。

- 3 -

しかし、後漢の行政区分を記録した『後漢書』郡国志には、三つの郡はいずれも掲載されていません。郡は、領土支配の基本単位であるにも拘わらず、三つの郡が後漢に存在しなかったのであれば、いつから郡が置かれたのでしょうか。

### 3. 『三国志』卷一 武帝紀 建安二十（二一五）年

秋七月、（魏）公（曹操）陽平に至る。……（張）魯潰え、巴中に奔

70 る。公の軍南鄭に入り、尽く魯の府庫の珍宝を得たり。巴・漢皆降

るや、漢寧郡を復して漢中と為す。漢中の安陽・西城を分けて西城郡と為

し、太守を置く。錫・上庸郡を分けて、都尉を置く。

↓ 張魯を降伏させた曹操が、漢中郡の東部を分けて西城郡とし、

75 西城郡の東（荊州の西）に、都尉を設置した（上庸都尉は申耽）

房陵郡、房陵太守は曹操によって設置されておらず、孟達が撃破し

た房陵太守の蒯祺を、劉表の殘党とする説もある

80 都尉は、郡に置かれた軍事官。官秩は比二千石。後漢では、光武帝の軍

備縮小政策により廃止され、その職掌は太守に併せられた。浜口重国「光

武帝の軍備縮小と其の影響」『東亜学』八、一九四三年、『秦漢隋唐史の

- 4 -

研究』上巻、東京大学出版会、一九六六年に所収）を参照。

85 4. 『三国志集解』武帝紀 建安二十（二一五）年

宋書 州郡志に、「**安康**令、漢の**安陽**県なり、**漢中**に属す。漢末に省き、魏復た立つ。**魏興**に属す。晋の太康元（二八〇）年、名を更む」と。

馬与龍曰く、「漢の**安陽**の地は蜀に属し、魏の境の及ぶ所に非ず。魏

90 復た立てて**魏興**に属せしむるの**安陽**は、即ち晋の**安康**にして、漢の県と距たりて甚だ遠し。沈志（宋書州郡志）は漢の**安陽**に蒙きを以て、是に非ず。……漢末 **西城**県と為り、建安二十四年、劉備は申儀を以て**西城**太守と為す。儀郡に抛りて魏に降り、魏文帝改めて**魏興郡**と為し、治は故の**西城**の故城なり」と。

95

↓西端の**安陽**県でなく、**西城**県（のちの**安康**県）が、

**西城郡**（のちに**魏興郡**）に属し、郡治であった

謝鍾英曰く、「建安二十（二一五）年、曹公**安陽**・**西城**を分けて**西城郡**

100 と為し、是 **西城**に郡を立つるの始め為り。建安二十四（二一九）年、先主申儀を以て**西城**太守と為し、是 **西城**の蜀に属するの始め為り。黄初元（二二〇）年、申儀魏に降り、魏儀に**魏興**太守を仮す。是 **西城**の魏に

還りて**魏興**と名を改むるの始め為り」と。

105 ↓建安二十年（二一五）年、曹操が任命した西城太守は不明

建安二十四年に劉備が任命した西城太守の申儀が、魏に降ると、

（蜀の）西城太守から（魏の）魏興太守へと横滑りした。

のちに申儀は、司馬懿に協力して孟達を撃破する

110 潘眉曰く、「郡の字は衍文なり。蓋し**安陽**・**錫**・**上庸**は皆漢中の属県な

り。魏武**安陽**・**西城**の二県を分けて**西城郡**を置き、又**錫**・**上庸**の二県を分けて都尉を置く。**上庸**本は郡に非ず、応に郡の字有るべからず。

銭氏考異（銭大昕廿二史考異）に云ふ、「**上庸**太守の申耽衆を挙げて（劉備に）降る。則ち**上庸**も亦太守を置くなり」と。

115 （潘）眉按ずらく、劉封伝注引魏略に云ふ、申耽使を遣はして曹公

に詣り、曹公上庸都尉を領せしむ。是れ**上庸**に都尉を置くの始めなり。

建安末に至り、**上庸**太守の申耽衆を挙げて（劉備に）降る。耽初め都尉と為り、是に至るに太守と称す。則ち已に改めて郡と為るなり。先主耽に命じて太守を領せしむこと故の如し。是れ蜀**上庸**を以て郡と為すなり。

120 黄初元（二二〇）年、**新城**に併はせ、太和二（二二八）年又立つ。……建安二十（二一五）年に当たり、**錫**・**上庸**は俱に県なり。当に郡の字有るべからず」と。

## 6. 参考

125 『漢書』卷二十八上地理志上

漢中郡、秦置く。莽新成と曰ふ。益州に屬す。戸十万一千五百七十、口三十万六百一十四なり。県十二。西城。旬陽。南鄭。褒中。房陵。安陽。成固。沔陽。錫よち（莽錫治と曰ふ）。武陵。上庸。長利。

130 『後漢書』志二十三郡国五益州

漢中郡。秦置く。雒陽の西千九百九十里なり。九城、戸五万七千三百四十四、口二十六万七千四百二なり。南鄭。成固。西城（巴漢志に、「漢末以て西城郡と為す」と云ふ）。褒中。沔陽。安陽。錫よち（錫有り、春秋時に錫穴と曰ふ）。上庸（本は庸国なり）。房陵（巴漢志に、「建安十三年、別けて新城郡に属せしむ」と云ふ）。

- 7 -

『三国会要』卷三十六輿地三

魏州郡下 荊州

魏興郡。建安二十（二二五）年、漢中の安陽・西城を分けて西城郡

と為す（袁山松書）。魏文帝名を改む（水経注）。県四を領す。西城

（安橋有り、呉將を遣はして孟達を救ふ処なり）。平陽（魏立つ）。

安陽（宋志、「漢末に省く、魏復た立つ」と云ふ）。錫よち。（楊晨）

145 ↓袁山松は、東晋の歴史家。著作は『後漢書』  
曹操が上庸と同時に都尉を設置した錫県は、西城（魏興）郡に

属していたことが窺われる。

新城郡。黄初中（二二〇）、漢中を分けて置く。県四を領す（寰宇記に、「郡は初め上庸を治とし、孟達破る後、治を房陵に移す」といふ）。房陵（元和志に、「後漢末、房陵県を以て房陵郡と為す」といふ）。

水経注に、「黄初中、房陵を分けて立つ」といふ。綏陽（魏立つ）。

宋志に、「後に改めて秭帰と為す」といふ。魏昌（水経注に、「黄初

中、房陵を分けて立つ」といふ。祁郷（水経注に、「房陵を分けて立

つ」といふ。宋志を案ずるに、祁陽（作る）。（楊晨）

155

上庸郡。太和二（二二八）年、新城の上庸・武陵・北巫を分けて置

き、四（二三〇）年廃す。景初元（二三七）年、又魏興の魏陽、錫

郡の安富・上庸を分けて郡と為し、後に又廃す。甘露四（二五九）

年、新城郡を分けて復た置く。県四を領す。上庸（白馬山有り。荊州

記に、「孟達新城太守と為り、山に登りて歎じて曰く、「此金城千里

なり」と。因りて上堵吟を作る」といふ。安富（魏立つ）。北巫（魏

立つ）。武陵。広昌（宋志に、「魏立つと疑ふ」と云ふ）。

140

- 8 -